



研究領域名 稲作と中国文明—総合稲作文明学の新構築—

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

なかむら しんいち
中村 慎一

研究課題番号：15H05964 研究者番号：80237403

【本領域の目的】

本領域の目的は、長江流域で新石器時代後期に勃興した稲作文明が、やがて中国文明の重要な構成要素となり、それを支え続けることになるまでの歴史的過程を再構することにある。

具体的には、①アジア稲作発祥地としての中国におけるイネ栽培化プロセスの高精度復元、②長江流域に成立した新石器時代稲作文明の興亡にかかる原因究明、③青銅器時代以降の中国文明において稲作文明が果たした役割の解明、の3点が中心的課題である。それらを通じて、稲作に基盤を置く世界で唯一の古代文明としての中国文明の特質を明らかにし、その強靱なレジリアンスの源泉について新たな洞察を得る。

【本領域の内容】

本領域では、考古学を中心に、歴史学、地理学、植物学、動物学、人類学、遺伝学、農学、地球化学、年代学等の、文・理の枠を超えた多様な分野の研究者が、最新の理論と技術とを総動員して中国文明論の刷新に挑む。

領域には五つの計画研究が置かれており、それぞれが「物質文化の変遷と社会の複雑化」「古環境の変遷と動・植物利用の諸段階」「民族考古学と化学分析からさぐる生業活動の諸相」「イネの栽培化と植物質食料資源の開発」「高精度年代測定および稲作農耕文化の食生活・健康への影響評価」をテーマに研究を進める。

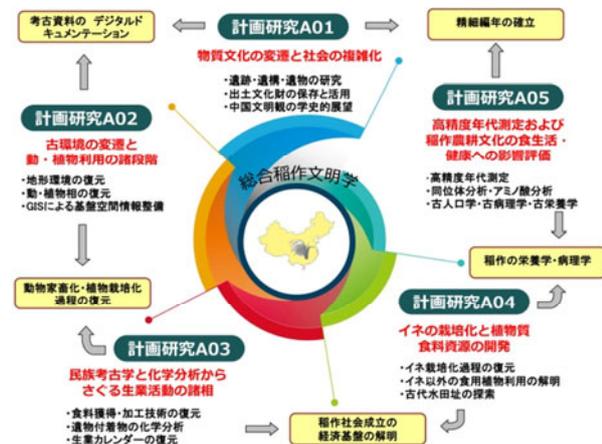


図1 領域全体の構成

【期待される成果と意義】

いわゆる世界四大文明のうち今日まで命脈を保っているのは中国文明のみである。もとより、中国においても洪水などの自然災害はしばしば猛威をふるい、また、大規模な戦乱が絶えず人民を苦しめてきた。それでも、中国文明は途絶えることはなかった。黄河流域の麦作地帯（文化）と長江流域の稲作地帯（文化）という、中国文明を特徴づける「二重構造」こそが、その強靱なレジリアンスの源泉ではないかと想定される。そのメカニズムの解明を通じて、これからの持続可能な文明社会の構築について提言を行うことが可能となる。

中国文明は世界の古代文明のなかで唯一、稲作を重要な構成要素とする文明である。その年代も、新石器時代後期文明にまで遡れば紀元前3千年紀に収まり、メソポタミア、エジプト、インダスの諸文明と同じ時間的深さを有することになる。そうした主張を通じて、中国文明の人類史的意義について西洋中心史観に修正を迫っていく。

中国国内に目を転じれば、長江流域の、イネそして水辺と分かちがたく結びついた‘ウェットな中国’の存在意義を再認識させると同時に、現代にまで及ぶ中国における政治と経済の関係（e.g. 政治都市北京と商業都市上海）を根本的に規定した要因の根源を探る試みでもある。また、労働慣行などの社会・経済関係がパーソナリティにも影響を及ぼすことがあるとするならば、中国大陸における「北方人」「南方人」の気質の違いも「二重構造」に起因している可能性が高い。その淵源を探ることは中国文化論全般に対する大きな寄与ともなるはずである。

【キーワード】

稲作文明：稲作を生業基盤としてもつ文明。紀元前3千年紀の長江流域で誕生し、その後の中国文明の重要な構成要素となった。

【研究期間と研究経費】

平成27年度—31年度
364,600千円

【ホームページ等】

<http://inasaku.w3.kanazawa-u.ac.jp/>